「伝二条為藤筆四半切後撰和歌集」考

立石大樹

『後撰和歌集』（以下、『後撰集』と略称）の諸本分類は、杉谷寿郎氏の『後撰和歌集　諸本の研究』を中心に示してみると、[1]

一、汎清輔本系統（二荒山本・片仮名本・伝慈円筆本・承安三年本・伝坊門局筆本）

二、古本系統（白河切・堀河本・胡粉地切・行成筆本・烏丸切・慶長本・雲州本・角倉切）

三、承保三年本系統（承保三年奥書本・伝正徹筆本）

四、定家本系統（無年号A類本・無年号B類本・年号本（天福二年本など））

の四類に今日大別される。しかし現存伝本のほとんどが藤原定家校定書写本の系統で占められ、さらにその定家本の中でも、二条・冷泉両家の証本とされた、天福二年三月二日書写のいわゆる、天福二年本の系統に属している。また、非定家本に至っても、一本一本がそれぞれに性格を異にしているため非常に複雑な関係である。

これらの成立過程は甚だ難解で、今日未だ一定の解決を見ないが、さらに定家本以前に行われていた本文をより広く調査していく必要があろう。そのためにもさらなる古筆切の収集、体系化が必要だと思われる。

一、伝二条為藤筆切について

『新撰古筆名葉集』の二条為藤の項を紐解くと、次のようにある。

同（二条）為藤　後撰朱星アリ

この「朱星」が何かは定かではないが、小松茂美氏[2]は、

「後撰朱星アリ」という「朱星」は「定家本」の系統の伝本に、時としてヲコト点（朱筆）を打ったものが見られるが、

あるいは、それをさしているのであろうか。と想定されている。

さて、この伝称筆者を二条為藤とする『後撰集』の断簡はすでに小松氏の著作に紹介されている。

まず『後撰和歌集　校本と研究』[3]で『新撰古筆名葉集』の記事を紹介されているが、この段階では現存する切の存在を一葉も確認されていない。その後、『古筆学大成』[4]に至って二葉が確認された。ただし『新撰古筆名葉集』の記事に見られる「朱星」と思われるものは当該断簡にはないため『名葉集』の記事に掲載されている断簡そのものかどうかは不明である。それはともかく、小松氏はその本文が従来知られた定家本に対する一異本の性格を有しているのでは、と二葉の異同からその可能性を示唆しておられる。

その後、久曾神昇氏の『古筆切影印解説Ⅱ　六勅撰集編』[5]に伝為藤筆の後撰集切が五葉影印、紹介されたが、この紹介断簡のうち『古筆学大成』のツレは『解説』で「九行書」と分類されている三葉で、残り二葉は筆跡、書式からみてツレの断簡ではなく、本文は定家本に一致している。

この他、本稿で取り上げる伝二条為藤筆切のツレの断簡と確認しうるものはなく、美術館の目録や骨董品の売立目録の類には一切見当たらない。よって、ここで問題とする切は、現在わずか五葉が確認されるのみである。

しかし、わずか五葉ではあるが、本文的に非常に注目すべき点を含んでいるため、今後の『後撰集』伝本研究のためにもここらあたりで一度その意義をまとめておく必要があろうかと思う。

古筆切を対象とする場合、ツレは多ければ多いほど有効である。例えば歌の出入り、配列の相違など大きな相違がまず見えてくるからであるが、五葉ではそれが俄かにはわからないという大きな欠点があるものの、ともかく当該断簡について基本的な情報を整理しておきたい。

番号	巻	書写内容	所蔵文献
1	七・秋下	359和歌部分から362まで	古筆学大成
2	七・秋下	378下の句から381作者名まで	古筆切影印解説
3	九・恋一	512詞書途中から514まで	古筆学大成
4	十・恋二	679詞書途中から680まで	古筆切影印解説
5	十一・恋三	790作者名から792詞書途中まで	古筆切影印解説

以上、わずかな内容が知られるだけだが、このわずかな中でも、その本文を諸本と比較してみると、甚だ特異な本文を有してい

ることが明らかとなる。以下、それらについて見てゆきたい。

二、作者名表記について

作者名表記は、七首の歌について判明するが、いかんせん情報量が少ないため、ここからは大きな問題を示すことは不可能である。それでも以下参考のために、当該切の作者名を天福二年本と比較して挙げてみよう。

番号	歌番号	当該断簡	天福二年本	備考
1	378	源むねゆき朝臣	源宗于朝臣	
2	379	よみ人しらす	よみ人しらす	烏もとかた
3	380	もとかた	もとかた	
4	512	よみ人しらす	よみ人しらす	
5	679	もとよしのみこ	もとよしのみこ	
6	680	あつよしのみこ	あつよしのみこ	
7	790	よみ人しらす	よみ人しらす	

（備考「烏」は烏丸切）

以上、作者は一箇所烏丸切「もとかた」としている（次の三八〇作者名が「もとかた」なので目移りで一首先に書いたか）ほかは、漢字仮名の違いがある程度で、諸本間に注目すべき異伝などはなく、作者名表記から大きく問題になる点はない。今後、ツレの断簡がさらに増大し多くの作者名表記が明らかになってゆけば問題とすべき点もはっきりと見えてこようが、現段階では作者名は一先ずおいて、その本文の注目すべき多くの点を、次章以下、本文そのものを見ながら特性を考えておきたいと思う。

三、本文について

三六〇番歌を当該断簡で示すと、

たいしらす

あきかせにさそはれわたるかりかねはものおもふ人のやとはよきなん

とある。天福二年本で示すと、

題しらす

秋風にさそはれ渡かりかねは物思ふ人のやとをよか南

とある。承保本が「たとはわかなん」とある以外、定家無年号本、二荒山本、片仮名本、慶長本は天福二年本に一致している。一方、伝坊門局本、雲州本、堀河本は断簡に一致している。天

福二年本の「よか南」は四段活用動詞「よく」の未然形「よか」、当該切は上二段活用動詞「よく」の未然形で対立する。動詞「よく」の活用は時代によって変化しているようで、[6] 解釈上は特にどちらでも問題ないと思われる。これは時代によって本文が動いていた様子がよく分かる例であり、当該断簡もその古い姿を留めているということができよう。

三七八番歌は当該断簡では下の句しか知られないが、次のようになっている。

もみちそむとや秋のきるらん

天福二年本で示すと、

もみぢそむとや山もきるらん

とあって、天福二年本と対立する。定家無年号A類本も天福二年本と同じで、そのほか堀河本「山のきたらむ」、二荒山本、片仮名本、白河切、承保本、伝坊門局筆本、雲州本、無年号B類本「山のきるらん」（表記は「む」が「ん」など違うが内容は同じ）、慶長本「山もみるらん」と、ことごとく諸本と対立する。上の句が断簡からでは分からないが、天福二年本で示してみると、

見ることに秋にもなる哉たつたひめもみちそむやと山もきるらん

とある。通釈すれば「見る度に秋になることだなあ。立田姫が紅葉を染めるということで、山も（その紅葉の衣を）着るのだろうか」とでもなろうか。では、天福二年本の上の句を借用して、当該断簡で通釈してみる。「見る度に秋になることだなあ。立田姫が紅葉を染めるということで秋そのものが（その紅葉の衣を）着るのだろうか。」となって、秋そのものが紅葉を纏ってやってくるというような解釈もできるのではなかろうか。

上の句が不明な以上、これ以上の詮索は無理であろうが、断簡でも解釈は十分可能であろう。少なくとも現存諸本では見られない異なる本文で『後選集』を享受していた人々が当時いたことの証明にはなる部分である。

三八〇番の詞書を見ると、当該断簡では

はらからとちのなかにいかなりける事か侍りけん

よみ人しらす

と「はらから」たちの中にどのようなことがあったのでしょう」となっている。天福二年本では、

はらからとちいかなることか侍りけん

とあって「のなかに」がない。断簡に一致するのは二荒山本、片仮名本、堀河本、承保三年本や定家無年号A・B類本も「のなかに」とある。わずかな相違ではあるが「はらから」たちに

何があったのか、という整理されたものよりも、「はらから」たちの中で何があったのか、と言うほうが緊迫感と言うか、兄妹の恋を匂わせる当該歌の詞書としては、当時の「歌語り」に近い、人々の息遣いが聞こえるような書き方となっているのではないだろうか。定家によって無年号本以降の形に整理される前の本文は「のなかに」をもっていたのである。

定家本より定家本以前の本文を伝二条為藤筆切が持っていることはこれらの例でも明らかだが、もう数例見ておきたい。

六七九歌は当該断簡では、

……きぬのくはれりけれは　　もとよしのみこ

あふことをとを山すりのかりころもきてははかなきねをそみそなく

とある。同じ箇所を天福二年本で示してみると、

しのひてかよひ侍ける女のもとよりかりさうそくおくりて侍けるにすれるかりきぬを侍けるに

もとよしのみこ

逢事はとを山とりのかり衣きてはかひなきねをのみぞなく

とある。

傍線部分の詞書部分の方は、前半部分を当該切が欠くため一先ず置いておくことにする。和歌本文の傍線部、天福二年本と一致するのは、堀河本、伝坊門局本、承保三年本以外の全て。堀河本は「わひしき」と独自異文だが、伝坊門局本、承保三年本は断簡に一致する。この部分、天福二年本の「かひなき」では、「遠く離れた女から送られた狩衣を着てみても無駄でひたすら泣いている」となろう。では、断簡の「はかなき」で解釈してみるとどうなるか。「遠く離れた人から分け与えられた狩衣を着てみても、はかなくてひたすら泣いている」といった程の意になろう。ともに解釈は可能であるが、断簡の「はかなき」のほうが、心情表現としては切なさがよく出ていると思う。

ただ同じ「はかなき」の伝坊門局本の該当歌の詞書を示すと

しのひてかよひ侍ける女のもとよりかりさうそくおくらせて侍けるにすれるかりきぬ侍けるに

とあり、また承保三年本の詞書では、

しのひてかよひはへりける女のもとよりかりさうそくをくりて侍けるにすれるかりきぬのはんへりけるに

とあって、「はかなき」が一致するからといって、詞書までも断簡に一致するわけではないことを確認しておきたい。

つまり詞書に見られる「くはれりけれは」は現存諸本との比較からは断簡の全くの独自異文といえるのである。直前の部分のツレが出現するか、同じ系統とみられる本文を有する断簡な

どの出現が待たれる個所として、注意しておくべきであろう。

続く六八〇番歌、断簡では

たいしらす　　あつよしのみこ

ふかくのみたのむ心はあしのねのわけても人にあはんとそ

おもふ

とあるが、天福二年本では

題しらす　　あつよしのみこ

深くのみ思ふ心はあしのねのわけても人にあはんとそ思

となっている。断簡に一致するのは二荒山本、片仮名本。堀河本が「たのむ心を」とある以外、諸本は天福二年本に一致する。この部分、天福二年本では、「深くあなたを思う私の心は芦の根が深く分け入るようにあなたに会いたいと思う」となろう。当該断簡では「深くあなたをあてしている私の心は芦の根が深く分け入るように深くあなたに会いたいと思います」となり、双方とも解釈としては問題ない。天福二年本の本文と多くの諸本は一致するが、諸本間において少数だからいって、決して誤写とは断定しきれない本文であり、また、こうした本文で『後撰集』を読んでいた読者がかつてはいたことを示す例であろう。

以上見てきたように、解釈が可能な諸本との異同箇所は、たとえ諸本間の中においては少数派の本文であっても、一概に誤写と言い切れるものではない。当時の人々が読んでいた『後撰集』は実に様々な本文であったといえよう。このようなことは古筆切をも視野に入れてこそ、初めてその様相が見えてくるのである。

四、伝二条為藤筆切の位置

では、わずか五葉という大きな限界はあるが、現在の『後撰集』の諸本分類上、伝藤原為藤筆切をどのような位置に置くことが可能か考えてみたい。

定家の天福二年本とは見てきたとおり大きく異なるが、その天福二年本との異同箇所でその他の諸本に一致する箇所がある部分をまず示しておきたい（天は天福二年本を示す。書写内容を問題としたので漢字・仮名の表記の相違は内容が同じなら一致するものとして扱った）。

箇所	当該断簡	天福二年本	一致する諸本
360和歌	やとはよきなん	やとはよか南	雲・堀・坊
380詞書	はらからとちのなかに	はらからとちに	A・B・二・片・雲・堀・承
513和歌	いなてふことに	いなてふ事を	二・片・雲・堀・慶
右同	みえしかは	かけしかは	二・片
679和歌	あふことを	逢事は	二・片・雲・堀
右同	はかなき	かひなき	坊・承
680和歌	たのむ心は	おもふ心は	二・片
791詞書	物いひける	物いひ侍ける	坊・雲・堀

（二→二荒山本・片→片仮名本・坊→坊門局筆本・雲→雲州本・堀→堀河本・承→承保三年本）

わずかな中から、諸本との関係を大胆に仮定してみると、定家本ではない「異本系統の一種」ではないかという小松氏の示唆がより明らかになってきたといえよう。ただ、古筆切として伝わる、白河切、胡粉地切、烏丸切、角倉切とは、断簡同士であり、比較できる箇所が極めて少なくいことから、今後さらに異本系統の古筆切を多く収集してゆくことが重大な課題であると考える。

では最後に、当該断簡の独自異文を最後にまとめておきたい。

箇所	当該断簡	天福二年本
361和歌	すきかてにする	過かてにして
378和歌	秋のきるらん	山もきるらん
380詞書	いかなりける事にか侍りけん	いかなることか侍りけん
679詞書	くはれりけれは	侍けるに
792詞書	人をゐて	人をくして

以上、伝藤原為藤筆切はわずかな断簡の中でも、はっきりと天福二年本と対立し、その多くは非定家本のいずれかの伝本が持つ本文と一致するものの、はっきりと同系統と言えるものはない。また少なからず独自異文を有することをも考えると、現段階ではいずれの諸本とも異なる「古本系統」の一本と考えておくことが無難であろう。今後さらにこの系統本の性格が明らかになるような、そのようなツレの出現を期して待ちたい。

おわりに

今日の『後撰集』伝本の圧倒的多数を占めるのは定家本である。しかし、田中登氏[7]の指摘にあるように、定家本が出現したからといってすぐに定家本一辺倒になったわけではない。鎌倉

期以降の古筆切であっても、非定家本系の本文を伝えるものは少なからず存在しているのである。本稿で取り上げた伝二条為藤筆切は、小松氏の調査によれば、十四世紀初期の書写になるという。[8] 伝存する切の断簡数は僅かでも、その本文的な意義が認められる切については、その存在に常に注意を払い、ツレを一枚でも多く集めることが重要であると考える。そして、こうした古筆切を『後撰集』の本文研究にいかに有効に利用してゆくかが今後の重要な課題と言えよう。

〔注〕

（1）杉谷寿郎『後撰和歌集諸本の研究』（昭和四六・笠間書院）、片桐洋一氏「『後撰集』の作者名と作者――新資料・伝坊門局筆本の紹介をかねて――」（『古筆と国文学　古筆学叢林一』昭和62年　八木書店）、拙稿「角倉切後撰和歌集考」（平成十九年『国文学』関西大学）による。伝坊門局筆本については、はっきりと清輔本系統とは言い切れないが、現段階では近似性がみられるという点でここに入れておく。

（2）小松茂美氏『古筆学大成』第七巻（平成二年・講談社）による。

（3）小松氏『後撰和歌集　校本と研究　研究編』（昭和三十六年・誠信書房）による。

（4）（2）に同じ。

（5）久曾神昇氏『古筆切影印解説Ⅱ　六勅撰集編』（平成六年・汲古書院）による。

（6）手近なものである『旺文社　古語辞典〔第八版〕』（平成四年・旺文社）にも「上代では上二段、中古では上二段と四段、中世以降は下二段活用が用いられた。」と解説がある。これに従えば、当該断簡は上二段活用であり、古い時代の本文ということになる。

（7）田中登氏『古筆切の国文学的研究』（平成九年・風間書房）による。

（8）（2）に同じ。

（たていし　だいき／本学大学院生）